

みどり野 園だより 9月 園長日記No.79

「パラリンピック 2020」

～子ども達に何を伝えるのか 2～



4403人の選手が参加するパラリンピックが開催されています。私自身は、オリンピックの卓球や野球ほど熱心には観ていませんが、いつもより意識的に観戦しながらその意義を考えています。

左写真のシンボルマークは「スリーアギトス」と呼ばれています。「アギト」とは、ラテン語で「私は動く」という意味で、困難があってもあきらめずに、限界に挑戦し続けるパラリンピアンを表現しています。赤・青・緑の三色は、世界の国旗で最も多く使用されている色ということで選ばれたそうです。

国際パラリンピック委員会（IPC）は、パラリンピアンたちに秘められた力こそが、パラリンピックの象徴であるとし、以下の四つの価値を重視しています。

- 1) 勇気…マイナスの感情に向き合い、乗り越えようと思う精神力
- 2) 強い意志…困難があっても、諦めず限界を突破しようとする力
- 3) インスピレーション…人の心を揺さぶり、駆り立てる力
- 4) 公平…多様性を認め、創意工夫をすれば、誰もが同じスタートラインに立てることを気づかせる力

パラリンピックはもともとイギリスの傷痍軍人のために社会復帰のための大会として始まったと聞いています。戦争で障がいを持ち希望を失いかけている人々のためのスポーツだったのです。今のように金メダルが何個取れた、世界一になったとか、スポンサーがどれだけつくか、どれだけ収入が得られるかなどは二の次だったと思うのです。

大阪市立木川南小校長の久保敬さんが、学校教育の現場で競争社会をあおる教育が中心になっていることに対して、「今のままでは、我が子が船（社会）に乗り遅れた時、助からない社会になっているということを感じてほしい。子どもを追い詰めて勉強させてきたのに乗り遅れた時、子どもたちの『話が違う』という絶望感は大きいでしょう。安心して生きられる社会に変える方が幸せなのではないでしょうか」「『何があっても安心だ』とどんな子どもも思えることは『社会を生き抜く』のではなく、『生き合う社会』をつくることにつながるはずです。そのためには、子どもに物差しをあてる教育を変える必要があると感じます。」と述べていらっしゃいます。 2021.8.27 朝日新聞

パラリンピックを観ていますと、それぞれの選手の頑張りや努力そのものは、素晴らしいものと感じますし、国際パラリンピック委員会（IPC）の定めた種目、障害分類、その程度に分類され、ルールが細かく設定され工夫がされていることがよくわかります。

しかし、結局、現代のオリンピックは、今の競争社会を肯定する価値観の枠の中での色合いが強いに思えます。本当に多様性を認め、共生な社会を目指すのであれば、オリンピックとパラリンピックの開会式は一緒にすればいいですし、商業ベースに乗らないために大きな費用をかけず開催する方法も検討すべきだと思います。また、オリンピックからはみ出た多くの障がい者や貧困に喘ぐ人々、差別や偏見に苦しむ人々、災害で苦しんでいる人々、国内紛争をさけて難民になった人々など、私たちが無意識に切り離している社会の現実を発信する大会へと発展していくことを期待いたします。

